

■ Topics | トピックス

製薬協特別番組 札幌テレビ放送

**「元気でなんもさ!～知っておきたいくすりの話～」
公開収録を開催**

2019年2月2日に札幌テレビ放送会館内のSTVホール(札幌市中央区)において、製薬協特別番組「元気でなんもさ!～知っておきたいくすりの話～」の公開収録が行われました。当日は約200名もの観覧者が参加し、糖尿病を例に新薬の価値を伝えるとともに、北海道の地域医療構想として、奈井江町の取り組みや、くすりの製造現場、そして治験の重要性等、出演者のみなさんと一緒に楽しく学ぶ機会となりました。なお、収録された番組は2019年3月2日に札幌テレビで放送され、製薬協のウェブサイトからもご覧いただけます。



会場(札幌テレビ放送)

元気でなんもさ!～知っておきたいくすりの話～

製薬協 広報委員会 コミュニケーション推進部会は、研究開発志向型の製薬企業および新薬が果たす社会的役割の重要性について、広く一般のみなさんに理解してもらうことを目的とし、地方テレビ局とタイアップして公開収録とテレビ放送を実施しています。

2018年度の公開収録は、2019年2月2日に札幌テレビ放送会館内のSTVホールで行われました。当日は、NTT東日本札幌病院院長の吉岡成人先生、北海道薬剤師会副会長の斉藤晃雄先生に加え、地元北海道で人気のタレント三好絵梨香さん、北海道出身の俳優の伊吹吾郎さんをゲストに迎え、製薬協からは、広報委員会の小川晃司委員長が参加しました。

番組の収録冒頭で、小川委員長より、「医療用医薬品」と「一般用医薬品」の違いや、「医療用医薬品」は「新薬」と「ジェネリック医薬品」の2つに分類されることを説明しました。

新薬と健康「糖尿病による死亡率全国10位」

北海道は、糖尿病による死亡率が全国第10位、女性に限定すると第4位であることが紹介され、北海道はメタボリックシンドロームが全国平均より多いこと、特定健診の受診率が低いこと等が理由との話がありました。

糖尿病新薬と治療

NTT東日本札幌病院のVTRを交え、糖尿病や糖尿病の新薬、チーム医療について詳しく紹介されました。

糖尿病は血液中の糖(血糖値)が慢性的に高くなる病気であること、血糖値はインスリンにより制御されること、そしてインスリンがうまく働かないと血糖値が高くなること、そして、その状態が続くと腎臓や神経、目等に合併症が引き起こされることがある等の説明がありました。日本全体として、平均寿命が延びていることから、高齢の糖尿病患者さんが増えていること、そのため高齢者に特有の病気がどんどん増えてきており、3大合併症の糖尿病網膜症、糖尿病腎症、糖尿病神経障害に加え、糖尿病に関連する疾患として、認知症、がん、骨粗鬆症、歯周病が問題になっていることが紹介されました。

また、VTRで紹介された糖尿病治療中の60代女性の患者さんは、食生活に気を付けながら、インスリンの注射と、この10年の間に広く使われるようになった糖尿病の新薬で血糖値をコントロールしていることが紹介されました。DPP-4阻害薬やSGLT2阻害薬の特徴が紹介された後、日常生活をサポートしている糖尿病療養指導士の活動として、患者さんの毎日の血糖値や体重をチェックし、なにか変化や異常がないかを確認し、食事のアドバイス等を行っていることが紹介されました。

VTR後、吉岡先生から、新薬によって低血糖のリスクを抑えることができ、糖尿病療養指導士との連携で血糖値がきちんとコントロールできるようになっている、血糖値を下げるとともに低血糖のリスクを最小限に抑えるように服薬管理できれば、患者さんにとっても安心感が高まっていくとの話がありました。

また、小川委員長からは、疾患ごとの現在の「治療の満足度」をまとめたグラフが紹介されました。その中で糖尿病、糖尿病腎症、神経障害、網膜症と、どれも薬剤の貢献度が上がっているとの話がありました。

奈井江町の地域医療構想

北海道奈井江町の地域医療の取り組みについてVTRで紹介されました。

町立国民健康保険病院は、3階部分がサービス付き高齢者向け住宅となっており、現在13世帯15人が暮らしていることが、実際に入所されている人の話を交えながら紹介されました。

また病院同士も協力しており、その仕組み作りをサポートした地元の開業医の方波見医院が紹介されました。病院に入院してからもかかりつけ医が診療を続けることができるオープンシステムによって、患者さんは慣れ親しんだ医師から引き続き診療を受けることができるメリットがあるとのコメントがありました。またそのオープンシステムではおくすり手帳が大きな役割を果たしており、薬剤師の斉藤先生から、無駄を省き安全な投薬ができる大切なツールであると話がありました。

くすりの製造過程

今回は、大塚製薬工場の釧路工場を取材し、輸液製剤の製造現場について、厳しい管理のもとで製造されていることがVTRで紹介されました。

また、釧路工場では、環境マネジメントシステムISO14001の認証を取得し、自然と融和した環境に配慮した工場を目指していること、2013年には、工場で使用する燃料を天然ガスに替えて二酸化炭素や大気汚染物質を削減できたことも紹介されました。

おくすりQ&A

今回もゲストのお2人、会場のみなさんと一緒に「くすり」についてのクイズが実施されました。その中で、薬の飲み方等といった身近でためになるくすりとの正しい付き合い方について、薬剤師の斉藤先生から解説がありました。



「おくすりQ&A」収録の様子

新薬の研究開発

新薬ができるまでのプロセスについて小川委員長より解説がありました。患者さんのもとに届けられるまでは9～16年もの年月がかかること、成功率は約2万5000分の1であること、費用は数百億円から1000億円を超えるといわれることが紹介されました。



収録の様子

治験について

国立病院機構北海道医療センターの協力のもと作成した、新薬の開発に必要な「治験」についての内容を紹介するVTRが上映されました。同センターの新野正明先生が、治験とはどのようなものであるかを解説し、実際に治験に参加した患者さんも出演しました。また、治験コーディネーターの仕事についても紹介があり、治験は多くの人々の協力があつてこ

そ成り立つものであることが示されました。

製薬産業を広く理解していただくための「製薬協の広報活動」

小川委員長より、製薬協の広報委員会は、一般のみなさんの製薬産業理解のために、製薬協のウェブサイトによる情報発信、今回のようなテレビシンポジウムの開催、新聞や雑誌、あるいは刊行物等を通じての情報提供活動を積極的に行っていることが紹介されました。

最後に

最後に、伊吹さんから「私たちは簡単にくすりといって口に入れているが、それまでの間に長い年月があり、そこまで来る間にいろんな人たちの苦勞と思いがあつての新薬なんだということがよくわかりました」、三好さんから「おくすりは私たちの生活になくってはならないものだと思うんですけど、なかなかくすりについて学ぶ機会はないと思うので、これからは積極的に情報を取り入れたりしていかなくはいけないなということを感じましたし、勉強になりました」との感想がありました。

小川委員長からの「くすりは、さまざまな病気の治療に大きな役割を果たし、人々の健康と幸福に寄与してきました。なかでもたゆまぬ研究開発によって生み出される新薬は、それまで有効な治療法がなかった病気とたたかう患者さんたちに大きな希望を与えてきました。これからも病気に悩む患者さんがいる限り、新薬開発という仕事に決して終わりはないと思っています」との挨拶で、「元気でなんもさ!～知っておきたいくすりの話～」の公開収録は大きな拍手の中、終了しました。

(広報委員会 コミュニケーション推進部会 田中 慎一)